

皇學館大学紀要第62輯（令和6年3月15日発行） 抜刷

教育・保育現場における「気になる子」
の行動認知

— 保育者と保育者志望学生を比較して —

渡 邊 賢 二
竹 内 和 佳 那

教育・保育現場における「気になる子」 の行動認知

— 保育者と保育者志望学生を比較して —

渡邊 賢二 (皇學館大学教育学部)

竹内和佳那 (伊勢市立御園第一保育園)

〈要旨〉本研究は、保育者と保育者志望学生を対象に、「気になる子どもの行動チェックリスト」尺度の「保育者との関係でみられる様子」、「他児との関係で見られる様子」、「集団場面で見られる様子」、「生活・遊びの場面で見られる様子」、「その他の様子」について、幼稚園教諭、保育士、大学3年生、4年生の差異を検討した。その結果、「その他の様子」を除いて、保育者志望学生より保育者の方が高い得点を示した。また、「気になる子どもの行動チェックリスト」尺度を因子分析した結果、「コミュニケーションや自己表現の欠如」、「集団行動や耐性の欠如」、「激怒や自己主張行動」、「暴力や攻撃行動」の4因子を見出すことができた。同様に差異を検討した結果、「集団行動や耐性の欠如」、「激怒や自己主張行動」については、保育者志望学生より保育者の方が高い得点を示した。さらに、保育者と保育者志望学生が気になっている子の行動について、4ポイント以上の項目を算出した結果、保育者が6項目、保育者志望学生は3項目であった。保育者はコミュニケーションをとるときの行動や予想もしない突然の子どもの行動、保育者志望学生は子どもの攻撃的な行動が気になることが明らかになった。

〈キーワード〉 気になる子，保育者，保育者志望学生

【問題・目的】

近年，幼稚園や保育園などの教育・保育現場では，教育・保育上何らかの課題がある子どものことを「気になる子」や「気になる子ども」という言葉で表現されることがしばしば見受けられる。本研究では「気になる子」という語を用いる。これらの言葉は，学術上の概念的定義を基に用いられはじめたというよりも，現場の実践を通して用いられてきているもののため，捉え方は人により様々であったり（田中，2008），障害があるかもしれないが診断がついていない場合や，子どもが示す行動が障害によるものか，環境のためなのかがわかりにくい場合に用いられたり，保育士の視点や子どもの年齢によっても異なり，その実態が十分に明らかにされているとは言えず（久保山・齊藤・西牧・當島・藤井・滝川，2009），明確に定義されることなく，あいまいなまま使われているのが実情である。

しかし、「気になる子」の行動特徴や視点などについての先行研究は数多く存在する。本郷・飯島・平川（2010）は保育者を対象に，気になる子どもの発達的特徴を検討した。その結果，3歳児群では落ち着きのなさ，4歳児，5歳児群では，対人的トラブル，落ち着きのなさ，順応性の低さ，ルール違反，衝動性が挙げられており，とりわけ4歳児群では順応性の低さ，5歳児群では落ち着きのなさ，衝動性において保育者の気になる程度が最も高かったことを報告している。玉井・堀江・寺脇・村松（2010）は保育者を対象に，就学前における気になる子どもの行動特性について検討した。その結果，保育者の視点から発達や行動の気になる就学前児の行動特性として，とくにすぐに気が散る（不注意），着席し続けることが困難（多動性），話の途中で口をはさむ（衝動性）の項目の出現率が高く，気になる子群の中に行動面の問題や対人関係の問題を持つ子どもがいることを明らかにしている。岡村（2011）は保育者が思う気になる子どもの特徴的な姿として，3歳児では目線のあいにくさ，落ち着き

がない、こだわりが強い、見通しがもてない、集団から離れていく、コミュニケーションがとりづらいなど、4歳児では友達とのトラブル、自分の思い通りにならないとパニックになる、注意散漫、話からイメージをもちにくい、手が出てしまう、言葉がでにくい、奇声を発するなど、5歳児では3、4歳児の特徴に加え、ルールが守れない、衝動的、暴力、暴言などで、全体的特徴として落ち着きのなさ、人との関わり、気持ちの切り替えにくさ、他児とのトラブル、目をあわさない、視線があいにくいことを挙げている。木曾（2014）は保育士を対象に、神経発達障害傾向児（診断は受けていないが、神経発達障害の傾向や特徴がある子ども）の行動特徴に関する質問紙調査を実施した。その結果、回答の割合が高かった項目は、落ち着きがなく、じっとしてられない、指示の理解が難しく、個別の指示がないと生活できない、こだわりが強く、切り替えができないという順であったことを報告している。これらの研究は、保育者を対象に、子どもの年齢によって、気になる子の行動について検討をしている。しかし、将来、保育者を目指している学生が認知する気になる子の行動との相違については、あまり検討されていない。保育者志望学生は、保育実践者としては未熟であるが、子どもが好きであること、授業や実習を通して教育・保育における基礎的・基本的な知識やスキル、技能を身に付ける学習機会を有していること、さらに保育者と卑近な距離にもある。保育者志望学生と保育者との認知の相違を明らかにすることは、今後の保育者養成の指導に有用な知見が得られるのではないと思われる。

子どもの気になる行動を測定する尺度としては、本郷・飯島・杉村・平川・平川（2010）が作成した「気になる子どもの行動チェックリスト（60項目）」を用いる。この尺度は、『保育者との関係で見られる様子』、『他児との関係で見られる様子』、『集団場面で見られる様子』、『生活・遊びの場面で見られる様子』、『その他の様子』の5領域に分類されており、一人ひとりの子どもの行動特徴がどの程度気になるかを調査している。しかし、本研究では、日々、通園する子ども全員の教育や保育を行っている保育者が子どもの行動をどの程度気になっているのか、また実習や授業などで学習している保育者志望学生が子どもの行動をどの程度気になっているか調査する。

本研究においては、幼稚園教諭と保育士の保育者と保育者志望の大学3年生と4年生を対象に、「気になる子どもの行動チェックリスト」を用いて、保育者と保育者志望学生が認知する「気になる子」の行動の差異、また5領域の関連について検討する。また、「気になる子どもの行動チェックリスト」60項目について因子分析を行い、その結果より、保育者と保育者志望学生が認知する「気になる子」の行動の差異、また関連について検討する。さらに、保育者と保育者志望学生が認知する「気になる子」の行動について、ポイントの高い項目を取り上げて比較する。

【方 法】

1. 調査対象者

幼稚園教諭、保育士、幼稚園教諭または保育士を目指す大学3年生と大学4年生の438人を調査対象者とした。内訳は、幼稚園教諭52人、保育士262人、大学3年生65人、大学4年生59人であった。

2. 手続きと倫理的配慮

S市の教育委員会と質問内容について話し合い、許可が得られた。教育委員会から各幼稚園と保育園に質問紙調査が配布された。質問紙調査の実施後、園ごとに教育委員会に集められた。大学生については、第2筆者が授業担当者に依頼し、許可を得て実施した。

調査表には、フェイスシートにプライバシー保護、回答の自由について明記し、参加に同意する場合のみ質問に回答するように記述した。なお、本研究は研究倫理委員会が審査を行い、承認されている。

3. 調査内容

(1) 基本的属性：幼稚園教諭と保育士については園名、年齢、保育者歴、大学生については学年を尋ねた。

(2) 気になる子どもの行動チェックリスト：本郷・飯島・杉村・平川・平川(2010)が作成した「気になる子どもの行動チェックリスト(D-4様式)」を

用いた。「気になる子どもの行動チェックリスト」は、5領域で各領域12項目の60項目で構成させている。調査対象者は各項目に示される子どもの特徴がどの程度気になるかを5段階評価で求められている。内訳については、「「バカヤロー」などの言葉を言う」、「自分が行った行動を認めようとせず、言い訳をする」などの12項目で構成されている『保育者との関係で見られる様子』、「ちょっとしたことでも意地悪されたと思ってしまう」、「他児の行為に対して怒る」などの12項目で構成されている『他児との関係で見られる様子』、「椅子に座っている時、他児に話しかける」、「ゲームや競争で1番にならないと気がすまない」などの12項目で構成されている『集団場面で見られる様子』、「日によって調子の良い時と悪い時の波が大きい」、「急に部屋から飛び出す」などの12項目で構成されている『生活・遊びの場面で見られる様子』、「楽しみ・興味を他人と共有しない」、「視線が合いにくい」などの12項目で構成されている『その他の様子』の領域別得点を求めている。本来は、保育者が「気になる子」を一人取り上げ、その子の示す行動について評定をするが、本調査では、知的発達の遅れが顕著な子や特定の子どもを対象とするのではなく、「気になる子」の行動について、子どもの示す行動がどの程度気になるのか、「1：まったく気にならない」、「2：ほとんど気にならない」、「3：少し気になる」、「4：気になる」、「5：たいへん気になる」の5段階（1点～5点）で評定するように回答を求めた。得点が高いほど「気になる」程度が高いことを示す。

【結果・考察】

1. 領域別得点、因子別得点の平均値（SD）と信頼性係数(α 係数)

各領域の平均値（SD）と信頼性係数（ α 係数）を算出した。「保育者との関係で見られる様子」の平均値（SD）と信頼性係数（ α 係数）は、3.41（.61）、 $\alpha = .88$ 、「他児との関係で見られる様子」は、3.42（.63）、 $\alpha = .85$ 、「集団場面で見られる様子」は、3.36（.65）、 $\alpha = .92$ 、「生活・遊びの場面で見られる様子」は、3.43（.64）、 $\alpha = .91$ 、「その他の様子」は、3.61（.75）、 $\alpha = .94$ であった。信頼性係数は十分な値を示しており、内的整合性が確認された。

これらの結果より、5領域の平均値には、あまり差異が認められなかった。

どの領域も 3.36点から 3.61点の間の値を示しており、子どもの多様な行動について、保育者や保育者志望学生はある程度気になっていることが考えられよう。

2. 領域別得点における保育者と保育者志望学生の比較

幼稚園教諭、保育士、大学3年生、4年生が「保育者との関係でみられる様子」、「他児との関係で見られる様子」、「集団場面で見られる様子」、「生活・遊びの場面で見られる様子」、「その他の様子」の5領域の行動について、どの程度気になるのか差異を検討するために、一要因分散分析を実施した（Table 1）。その結果、「保育者との関係でみられる様子」、「他児との関係で見られる様子」、「集団場面で見られる様子」については、大学3年生と4年生より幼稚園教諭と保育士の方が有意に高い得点を示した。「生活・遊びの場面で見られる様子」については、大学3年生より幼稚園教諭と保育士の方が有意に高い得点を示した。「その他の様子」については、有意差が認められなかった。

これらの結果より、保育者や他児との関わり、また集団や遊びの場面での気になる子どもの行動については、保育者志望学生より保育者の方が高い得点を示しており、日常生活場面における子どもの行動については、保育者は常に観察しているために差異が認められたのではないかと推察される。その他の様子については差異が認められなかった。これは、子ども自身の行動の項目が多いため、保育者志望学生も保育者と同様、気になる行動と捉えているのではないかと推察される。

Table 1 各領域の幼稚園教諭、保育士、大学3年生、4年生の比較

領域	①幼稚園教諭	②保育士	③3年生	④4年生	F値	多重比較
保育者との関係でみられる様子	3.53	3.50	3.17	3.18	9.15***	③④<①②
SD	.65	.59	.55	.58		
他児との関係で見られる様子	3.60	3.51	3.17	3.19	9.49***	③④<①②
SD	.59	.63	.57	.62		
集団場面で見られる様子	3.45	3.49	3.07	3.02	14.56***	③④<①②
SD	.58	.64	.56	.62		
生活・遊びの場面で見られる様子	3.59	3.49	3.11	3.36	7.75***	③<①②
SD	.60	.64	.58	.63		
その他の様子	3.74	3.63	3.47	3.59	1.37 n.s.	
SD	.70	.79	.61	.74		

*** $p < .001$

3. 保育者と保育者志望学生の5領域の相関関係

保育者と保育者志望学生別に、5領域の関連を検討するために、ピアソンの積率相関係数を求めた（Table2）。その結果、保育者、保育者志望学生ともに、すべての領域間で有意な正の相関関係を示した。

これらの結果より、保育者と保育者志望学生ともに、ある領域だけ、子どもの行動が気になっているのではなく、日常生活場面で、子どもがとるすべての行動が同じ程度気になるということを示していると思われる。

Table2 保育者と学生の5領域の相関関係

	保育者との関係	他児との関係	集団場面	生活・遊び場面	その他
保育関係		.72***	.66***	.70***	.57***
他児	.79***		.74***	.72***	.64***
集団	.73***	.70***		.82***	.63***
生活遊び	.58***	.62***	.61***		.72***
その他	.50***	.59***	.51***	.77***	

*** $p < .001$

左下は保育者, 右上は学生

4. 5領域の因子分析

「保育者との関係で見られる様子」、「他児との関係で見られる様子」、「集団場面で見られる様子」、「生活・遊びの場面で見られる様子」、「その他の様子」の5領域60項目については、先述したように保育者が「気になる子」を一人取り上げ、その子の示す行動について評定をする項目である。本研究は保育者と保育者志望学生が「気になる子」の行動について、子どもの示す行動がどの程度気になるのかを検討しているために、探索的に60項目に対して最尤法による因子分析を実施した。その結果、固有値の変化と因子の解釈可能性を考慮すると、4因子構造が妥当であると考えられた。そこで再度4因子を改定して最尤法・Promax回転による因子分析を行った。その結果、十分な因子負荷量を示さなかった4項目を分析から除外し、残りの56項目に対して再度最尤法・Promax回転による因子分析を行った。Promax回転後の最終的な因子パターンと因子間相関をTable3に示す。なお、回転前の4因子で56項目の全分散を説明する割合は50.40%であった。第1因子は、「話し言葉によるコミュニケー

ションが難しい」、「表情に異常が見られる」など16項目で構成されている。各項目は、「他者に対してコミュニケーションをうまくとれなかったり、自分が考えたこと、感じたことをうまく表現できない行動を示す」という内容を表現しているため、『コミュニケーションや自己表現の欠如』と命名した。第2因子は、「周りの子どもにつられて騒いでしまう」、「集団場面より、一対一場面の方が落ち着いていられる」など23項目で構成されている。各項目は、「集団で行動することができなかつたり、ルールを守れない行動を示す」という内容を表現しているため、『集団行動や耐性の欠如』と命名した。第3因子は、「他児の行為に対して怒る」、「保育者や教育者の話を遮って自分の考えを突然述べようとする」など12項目で構成されている。各項目は、「他者に対して怒ったり、反抗すること、強く自己主張をする行動を示す」という内容を表現しているため、『激怒や自己主張行動』と命名した。第4因子は、「特定の子どもに対し、理由もなく突然たたいたり、引っ張ったりする」、「他児の製作物を壊したり遊びを妨害したりする」など5項目で構成されている。各項目は、「他者に対して暴力や攻撃的な行動を示す」という内容を表現しているため、『暴力や攻撃行動』と命名した。

保育者と保育者志望学生が認知する気になる子の行動下位尺度の平均値（SD）と信頼性係数（ α 係数）を求めた。『コミュニケーションや自己表現の欠如』の平均値（SD）は3.62（.71）、 $\alpha = .95$ 、『集団行動や耐性の欠如』は3.32（.61）、 $\alpha = .95$ 、『激怒や自己主張行動』は3.23（.62）、 $\alpha = .88$ 、『暴力や攻撃行動』は3.97（.81）、 $\alpha = .87$ であった。

4因子の平均値をみると、『暴力や攻撃行動』の平均値が最も高かった。他児や保育者に対する身体や言葉の攻撃であり、人を傷つける行為でもあることから、保育者や保育者志望学生としては最も気になる行動になると考えられる。先述の5領域の平均値（3.36～3.61）とは相違が認められた。

教育・保育現場における「気になる子」の行動認知（渡邊・竹内）

Table3 保育者と学生が認知する「気になる子」の行動の因子分析

	I	II	III	IV
I：コミュニケーションや自己表現の欠如				
その他11：音・味・感触などに過敏に反応する	.88	-.14	-.03	.00
その他9：体の動きがぎこちない	.85	-.23	.03	.12
その他7：表情に異常が見られる	.75	-.29	.01	.28
その他4：話し言葉によるコミュニケーションが難しい	.73	.06	-.15	.11
その他12：課題や活動を順序だてて行うことが難しい	.72	.20	-.08	-.06
生活遊び12：予定が急に変わると混乱する	.72	.11	-.09	-.03
その他6：変わった声や話し方をする	.71	-.05	.11	.04
その他8：特異な単語や表現を自分でつくり出す	.68	-.11	.15	.10
その他10：相手の表情・気持ちが理解できない	.67	.11	-.03	.09
その他3：ごっこ遊びに参加できない	.66	.14	.06	-.06
その他5：常同的で反復的な行動	.62	.19	-.05	.04
生活遊び11：物などを示し、具体的に指示しないと理解が難しい	.58	.36	-.01	-.27
その他1：楽しみ・興味を他人と共有しない	.56	.09	.13	.03
その他2：視線が合いにくい	.55	.19	-.03	.06
生活遊び2：急に部屋から飛び出す	.42	.12	-.07	.39
生活遊び10：同じ失敗を何度も繰り返す	.40	.35	.09	-.09
II：集団行動や耐性の欠如				
集団11：周りの子どもにつられて騒いでしまう	-.17	.82	.08	-.07
集団4：手足をそわそわ動かしたり、きよろきよろしたりする	.03	.77	-.05	-.03
集団3：じっと椅子に座ってられない	-.02	.76	-.08	.06
集団6：列から飛び出す	-.03	.71	-.07	.19
集団5：集団場面より、対一場面の方が落ち着いていられる	.14	.67	.05	-.18
集団10：全体への指示に従わない	-.13	.67	-.22	.28
集団9：集団で移動するとき、ついてこない	.15	.60	-.27	.34
他児4：遊びの途中で別の遊びに移る	-.12	.58	.39	-.22
他児7：他児にちょっかいをだす	-.31	.58	.29	.10
他児6：他児とともに一定時間待っていることができない	.08	.57	.11	.11
集団1：椅子に座っている時、他児に話しかける	-.26	.57	.27	.11
生活遊び7：課題の材料を見ると、すぐに手を出す	-.16	.57	.07	-.02
集団12：新しい場面ではなかなか慣れない	.08	.55	.20	-.08
生活遊び9：不得意なことに取り組もうとしない	.13	.50	.20	-.10
集団8：順番を守らないで、横から入り込もうとする	-.05	.49	-.04	.47
集団7：遊びのルールを破って自分勝手に振る舞う	.06	.47	-.02	.42
生活遊び8：同じ事を何度も繰り返す	.36	.47	-.01	-.07
保育関係3：ほかのことが気になって、保育者や教育者の話を最後まで聞けない	.05	.46	.20	-.04
生活遊び6：好きなことだけに集中する	.41	.44	.11	-.25
集団2：ゲームや競争で1番にならないと気がすまない	-.12	.43	.31	.18
生活遊び4：いけないとわかっているのに、ついついやってしまう	.18	.39	.07	.17
生活遊び3：満足を先に延ばすことが難しい	.19	.38	.22	.00
保育関係4：「待ってて」などの指示に従えない	.15	.37	.26	-.08
III：激怒や自己主張行動				
他児2：他児の行為に対して怒る	-.11	.13	.59	.11
他児1：ちょっとしたことでも意地悪されたと思うしまう	.00	.08	.59	.11
保育関係9：保育者や教育者に身体接触を求める	.14	-.08	.56	.04
保育関係7：話している途中で別の話題に移ってしまう	.01	.26	.53	-.06

教育・保育現場における「気になる子」の行動認知（渡邊・竹内）

保育関係6：保育者や教育者の話を遮って自分の考えを突然述べようとする	-.06	.30	.53	.00
保育関係10：保育者や教育者に対して，反抗したり，抵抗したりする	-.10	.13	.51	.23
保育関係2：自分が行った行動を認めようとせず，言い訳をする	-.12	.12	.48	.14
保育関係5：一度主張し始めるとなかなか自分の考えを変えない	-.03	.32	.47	-.09
他児3：クラス以外の子どもや大人の出入り，状況に敏感である	.30	.01	.46	-.03
保育関係8：保育者や教育者が注意を向けていない時に，唐突に働きかける	.03	.23	.46	.02
他児9：他児に身体接触を求める	.21	-.17	.43	.28
保育関係11：「止めなさい」などの否定的な言葉に過剰に反応する	.27	-.16	.40	.26
IV：暴力や攻撃行動				
他児12：他児の製作物を壊したり遊びを妨害したりする	.03	.03	.07	.78
他児10：特定の子どもに対し，理由もなく突然たたいたり，引っ張ったりする	.09	-.05	.08	.75
他児11：泣いている子を見て笑ったり楽しんだりしている様子がある	.16	-.15	.12	.75
保育関係12：注意されると保育者や教育者を叩いたり蹴ったりする	.19	-.04	.19	.54
保育関係1：「バカヤロー」などの言葉を言う	.03	-.11	.37	.42
<hr/>				
因子間相関	I	.56	.41	.57
	II		.57	.39
	III			.36

5. 気になる子の行動下位尺度における保育者と学生の比較

幼稚園教諭，保育士，大学3年生，4年生が認知する気になる子の行動下位尺度である「コミュニケーションや自己表現の欠如」，「集団行動や耐性の欠如」，「激怒や自己主張行動」，「暴力や攻撃行動」について，どの程度気になるのか差異を検討するために，一要因分散分析を実施した（Table 4）。その結果，「集団行動や耐性の欠如」，「激怒や自己主張行動」については，大学3年生と4年生より幼稚園教諭と保育士の方が有意に高い得点を示した。その他については，有意差が認められなかった。

これらの結果より，学生は，実習などで教育・保育現場の経験はあるが，日常的に子どもを教育・保育をしているわけではないため，子どもの集団行動や耐性の欠如，強い自己主張などの行動の体験頻度は保育者より少ないと考えられるため，このような差異が生じたと思われる。また暴力や攻撃行動の平均値は，保育者，保育者志望学生ともに，約4ポイントであり，他の子どもの行動と比較して，気になる行動であると考えられる。先述したが，人を傷つける行動であるため，保育者と保育者志望学生は非常に気になる行動と考えていると思われる。

教育・保育現場における「気になる子」の行動認知（渡邊・竹内）

Table4 気になる子の行動下位尺度の幼稚園教諭，保育士，大学3年生，4年生の比較

	①幼稚園教諭	②保育士	③3年生	④4年生	F値	多重比較
コミュニケーションや自己表現の欠如	3.75	3.65	3.42	3.60	2.43 n.s.	
SD	.64	.74	.60	.71		
集団行動や耐性の欠如	3.44	3.44	2.99	3.03	16.46***	③④<①②
SD	.57	.61	.49	.56		
激怒や自己主張行動	3.42	3.31	3.00	3.00	8.79***	③④<①②
SD	.65	.60	.59	.60		
暴力や攻撃行動	4.08	3.98	3.90	3.94	.77 n.s.	
SD	.96	.80	.75	.82		

*** $p<.001$

6. 保育者と学生が認知する気になる子の行動下位尺度の相関関係

幼稚園教諭，保育士，大学3年生，4年生が認知する気になる子の行動下位尺度である「コミュニケーションや自己表現の欠如」，「集団行動や耐性の欠如」，「激怒や自己主張行動」，「暴力や攻撃行動」の関連を検討するために，ピアソンの積率相関係数を求めた（Table5）。その結果，すべての下位尺度間において，有意な正の相関関係を示した。保育者，保育者志望学生共に，すべての下位尺度間で高い相関関係が認められた。

これらの結果より，各領域の相関関係と同様，保育者と保育者志望学生ともに，ある下位尺度だけ，子どもの行動が気になっていることではなく，日常生活場面で，子どもがとるすべての行動が同じ程度気になるということを示していると思われる。

Table5 保育者と学生の気になる子の行動下位尺度の相関関係

	コミュニケーションや自己表現の欠如	集団行動や耐性の欠如	激怒や自己主張行動	暴力や攻撃行動
コミュニケーションや自己表現の欠如		.61***	.46***	.62***
集団行動や耐性の欠如	.69***		.71***	.58***
激怒や自己主張行動	.58***	.73***		.66***
暴力や攻撃行動	.65***	.53***	.57***	

*** $p<.001$ 左下は保育者，右上は学生

7. 保育者と保育者志望学生が認知する項目別の高平均値

保育者と保育者志望学生が認知する各項目の平均値を算出した。その中で、平均値が4ポイント以上の項目については、高得点順に、保育者は「視線が合にくい」4.14, 「他児の製作物を壊したり遊びを妨害したりする」4.12, 「特定の子どもに対し、理由もなく突然叩いたり、引っ張ったりする」4.07, 「泣いている子を見て笑ったり楽しんだりしている様子がある」4.04, 「急に部屋から飛び出す」4.03, 「相手の表情・気持ちが理解できない」4.02の6項目、学生は「泣いている子を見て笑ったり楽しんだりしている様子がある」4.09, 「特定の子どもに対し、理由もなく突然叩いたり、引っ張ったりする」4.06, 「注意されると保育者や教育者を叩いたり蹴ったりする」4.06の3項目であった。

これらの結果より、保育者は日常子どもと接するとき、コミュニケーションをとるときの行動や予想もしない突然の子どもの行動が気になることが推察される。学生も類似している箇所もあるが、子どもの攻撃的な行動が気になると推察される。

【総合的考察】

本研究は、幼稚園教諭と保育士である保育者と大学3年生と4年生の保育者志望学生がどのような子どもの行動が気になるか、保育者と保育者志望学生の差異の検討、またどのような行動が気になるか項目別に検討した。差異の検討の結果、「保育者との関係でみられる様子」、「他児との関係で見られる様子」、「集団場面で見られる様子」、「生活・遊びの場面で見られる様子」については、保育者志望学生より保育者の方が高い得点を示した。また因子分析の結果、「コミュニケーションや自己表現の欠如」、「集団行動や耐性の欠如」、「激怒や自己主張行動」、「暴力や攻撃行動」の4因子が見出された。同様に、差異の検討の結果、「集団行動や耐性の欠如」、「激怒や自己主張行動」については、保育者志望学生より保育者の方が高い得点を示した。次に、平均4ポイント以上の項目を算出した結果、保育者は6項目、学生は3項目であった。保育者はコミュニケーションをとるときの行動や予想もしない突然の子どもの行動、学生は子どもの攻撃的な行動が気になることが明らかになった。

これらより、子どもと接するのは実習での期間が主である保育者志望学生と、日常長い時間子どもと接している保育者との認知には相違が認められた。保育者志望学生が多様な課題がある子どもをより理解するためには、色々な子どもと関わる時間を長くすることが必要であると思われる。岡村（2011）は、保育者は子どもの気になる行動の全般的な特徴として、落ち着きのなさ、人との関わり、気持ちの切り替えにくさ、他児とのトラブル、目をあわさない、視線があいにくいことと述べている。本研究の保育者が認知する気になる子の行動と類似していると思われる。また久保山・齊藤・西牧・當島・藤井・滝川（2009）は、気になる子がいる場合の課題として、他児との関係、集団活動の課題、行動・生活面、コミュニケーションなどを挙げており、本研究結果と類似していると思われる。本研究結果や先行研究の結果を保育者志望学生に教示していく必要があるだろう。

最後に、今後の課題について述べる。本研究は、気になる子の行動について、保育者と保育者志望学生を比較したが、保育者が子どものどのような行動に困り感をもっているのか、また多様な課題がある子どもをどのように支援しているのか検討し、得られた結果を保育者志望学生に教示していく必要があると思われる。

本研究は、主に保育者と保育者志望学生が認知する気になる子の行動について、平均値を算出して研究を実施したが、個人差についての検討はしなかった。保育者と保育者志望学生の一人ひとりの認知の差異は生じると思われるため、今後は個人差に焦点をあてて、検討する必要があるだろう。

【文 献】

- 本郷一夫・飯島典子・平川久美子（2010）. 「気になる」幼児の発達の遅れと偏りに関する研究 東北大学大学院教育学研究科研究年報, 58, 2.
- 本郷一夫・飯島典子・杉村僚子・平川久美子・平川昌弘（2010）. 「気になる」子どもの保育と保護者支援 建帛社.
- 木曾陽子（2014）. 保育における発達障害の傾向がある子どもとその保護者への支援の実態 社会問題研究, 63, 69-82.

- 久保山茂樹・齊藤由美子・西牧謙吾・當島茂登・藤井茂樹・滝川国芳（2009）. 「気になる子ども」「気になる保護者」についての保育者の意識と対応に関する調査－幼稚園・保育所への機関支援で踏まえるべき視点の提言－ 国立特別支援教育総合研究所 研究紀要, 36, 55－76.
- 岡村裕子（2011）. 保育者からみた「気になる子ども」についての調査研究 滋賀大学大学院教育学研究科論文集, 14, 37－48.
- 玉井ふみ・堀江真由美・寺脇希・村松文美（2011）. 就学前における「気になる子ども」の行動特性に関する検討 人間と科学 県立広島大学保健福祉学部誌, 11, 1, 103－112.
- 田中秀明（2008）. 保育者養成校の学生が抱く「気になる子」についての基礎的研究 清泉女学院短期大学研究紀要, 27, 57－65.

付記

本調査にご協力をいただいた鈴鹿市の幼稚園教諭，保育士の皆さま，心より感謝申し上げます。また，本研究は第2著者が作成した卒業論文のデータを再分析し，執筆しています。

Behavior of “child of concern” in kindergarten and nursery centers;
Difference of preschool teachers and university students

Kenji Watanabe (Education Department, Kogakkan University)

Wakana Takeuchi (Misonodaiichi Nursery Center in Ise city)

Abstract

This study was to investigate the difference of “child of concern” behavior among preschool teachers and university students. Preschool teachers showed higher points than university students in “relationship to preschool teachers,” “relationship to other children,” “situation in group,” and “situation in life and plays.” We received four major factors in “lack of communication and self-presentation,” “lack of group behavior and tolerance,” “behavior of violent anger and self-assertion,” and “behavior of violence and offense.” Preschool teachers showed higher points than university teachers in “lack of group behavior and tolerance,” and “behavior of violent anger and self-assertion.” About more than 4 points item, preschool teachers had 6 items, and university students had 3 items. “Child of concern” behaviors that preschool teachers recognized were communicative behavior and sudden and unexpected behavior, and that university students recognized were aggressive behavior.

Keywords : child of concern, preschool teachers, university students

